蒙古と高麗〈一二三一〉

——蒙古の第一次高麗侵攻——

山口　修

まえがき

蒙古の高麗侵略は一二三一年に始まり、以来一二六〇年ついに高麗が降伏するまで、前後三十年間にわたってつづけられた。さきに高麗は契丹（遼）および女真（金）の侵攻をこうむり、その災厄も大きかったとはいえ、戦禍の及ぶところは領域の北部にとどまり、また最後には撃退することを得たのである。しかるに蒙古の軍勢をむかえては、全土がその馬蹄に蹂躙せられ、鶏犬一空といわれるほどの奪掠をほしいままにせしめたのみならず、最後は降表を掲げて、その属邦にならざるを得なかった。

この三十年間の征戦に関して考究された論文は数多いが、なかでも注目すべき研究として次の諸篇を挙げることができよう。

箭内　亙『蒙古の高麗経略』（満鮮地理歴史研究報告第四、蒙古史研究）

池内　宏『金末の満州』（満鮮地理歴史研究報告第十、満鮮史研究中世第二冊）

池内　宏『蒙古の高麗征伐』（満鮮地理歴史研究報告第十、満鮮史研究中世第三冊）

これらは、いずれも一代の碩学が精魂をこめられたる雄篇であり、今日に至るまで之等を凌駕する論考はあらわれていない。しかし、これら諸篇が発表されたのは大正七年および大正十年という過去であり、高麗史上の大事件にして、しかも長期にわたるものを一挙に論ぜられたものである故に、必ずしも征戦の全貌を明らかにしたとは言い得ない。その論旨においても、半世紀余をへた今日において、時に首肯し得ぬ点の生じ来ったことも、蓋し止むを得ぬところであろう。

かつて私も『蒙古軍の高麗侵入』と題して、その第一次侵略を論じた（熊本大学「法文論叢」第九号、昭和三十二年）。しかし紙数の制限を受けて充分に論ずることを得ず、細説は省略したところが多い。かつ時日の経過に伴って、論旨を改むべき箇所も生じた。よって玆に、再び第一次侵略について考察を加え、今後も幸にして紙幅を与えられるならば、第二次以降の侵略経過を明らかにして、高麗の服属に及びたいと思う。それは同時に、高麗が日本遠征に助勢せざるを得ぬ立場に追いこまれた事情を、明らかにすることにもつながるわけである。

なお本稿は一二三一年、すなわち蒙古においては太宗オゴタイの三年、高麗においては高宗十八年にかかる蒙麗の交戦を扱っている。ところで蒙古の軍勢が高麗の領内に入ったのは、このときが初めてではない。すでに成吉思汗の時代にも、高麗は蒙軍の越境をゆるしていた。成吉思汗の時代における蒙麗関係については別の小論を用意しているから、ここでは本稿と関連ある事項を、あらかじめ摘記しておきたい。

さきに朝鮮半島の東北部から豆満江の流域にかけては、金国に叛した蒲鮮萬奴が東真国を建て(一一七)、また半島の北部一帯には蒙古に逐われた契丹人の部衆が侵入していた。よって蒙古は一二一八年、高宗五年にあたって、東真の兵と共に半島に出兵した。高麗もまた、これに協力し、契丹人を討滅するに至る。しかし、この征戦によって高麗は、蒙古に対して弟と称し、歳貢の義務を負わねばならぬこととなった。

この後、蒙古の受貢使は、しばしば高麗に赴いて過大の貢物を求め、しかも態度はすこぶる尊大であった。高麗の朝廷は、その応接に苦しんだ。たまたま成吉思汗は一二一九年より西征の途に上り、東方に対する圧力も緩んでいる。これに乗じて一二二四年には、蒲鮮萬奴も蒙古に叛した。

その翌年、すなわち高宗十二年正月、蒙古の受貢使たる著古與（ジェグユ）は、高麗に来っての帰途、国境の付近において殺された。何者の所業であったかは明らかでない。しかも成吉思汗は西征より還ったばかりであり、つづいて西夏への親征に乗出したため、東方を顧る余裕がなかった。一二二七年、成吉思汗は西夏遠征の陣中に斃れた。こうして東方の処置は、すべて後継者の手に委ねられる。オゴタイ朝における大規模な東征は、このような背景のもとに開始されたのであった。

一

蒙古は太宗オゴタイの三年（一二三一）辛卯の歳八月をもって、高麗への侵入を開始した。元史三太宗紀は、三年辛卯八月の条に「是の月、高麗、使者を殺せしを以て、撒禮塔に命じ、師を率いて之を討たしめ、四十余城を取る」と記す。また高麗史二三高宗世家二においても、辛卯〔高宗〕十八年八月の条に「壬午（二十九日）、蒙古の元帥撒禮塔、咸新鎮を囲み、鉄州を屠る」とあって、八月末には高麗の軍と交戦していたことを示している。出征の名目は、高宗十二年（一二二五）正月に受貢使の著古與 Jeğüyü が殺されたことにより、その責を問う、というものであった。そして総帥として出征軍を率いたのは、撒禮塔 Sarita であった。*

* 撒禮塔は、元史・高麗史などの文献において、さまざまの字をもって写されている。箭内亙『蒙古の高麗経略』附録の注には、十一種の字面が示された。そのうち撒禮塔・撒里塔・撒里打などは Sarita の音訳であり、ときに撒里塔火里赤のごとく

Qorči (箭筒士) の称を付する。また撒里台・撒児台は Sar(i)tai の音訳である。本稿においては元史本紀や高麗史世家の表記にしたがって、撒禮塔とあらわす。

ところで撒禮塔は、高麗へ出征するにさきだち、遼東の経略にあたっていた。遼東には、なお金国の勢力が残存していたからである。ただし撒禮塔が遼東へ出征した年次については、史料の示すところが必ずしも明確ではない。そこで池内宏『金末の満洲』(以下『金末』と略称)においては、とくに一節を設け、慎重かつ綿密なる考証をほどこされた上、これを「高麗征伐の前年なる太宗二年なりと断ぜ」られた。この結論に私もまた従いたいと思うけれども、論証の過程には些か首肯しがたい箇所も存するので、本稿の主題と関連ふかい点に限って。検討を加えておきたい。

まず元史一四九王榮祖伝を見るに、榮祖は父の王珣の死後、命ぜられて遼東に出征した。その年次は示されていない。すなわち——

會金平章政事葛不哥行省於遼東、咸平路宣撫使蒲鮮萬奴僭号於開元。遂命榮祖、還副撒里台、進討之。拔蓋州・宣城等十餘城、葛不哥走死。……己丑。授北京等路征行萬戸、換金虎符。伐高麗、圍其王京。高麗王力屈、遣其兄淮安公、奉表納貢。進討萬奴擒之。

この記事によって遼東出征の年次を考えれば、あたかも太宗元年たる己丑(一二九)以前であったが如くである。ところが伝は己丑の歳にかけて「高麗を伐ち、其の王京を囲む」以下の記事を掲げる。もちろん征麗の年次を〃己丑に懸けて記るされたるは誤り〃(池内)と言わねばならぬ。しかし〃己丑を太宗三年辛卯の誤りなり〃(池内)* と断ずることはできないであろう。同伝は太宗三年の征麗も、五年の萬奴討滅も、その後の屢次の出征も、ことごとく年次を示していない。同伝に掲げられた年次は、この己丑と、中統元年(一二六〇)のみなのであり、それは共に紀位のあった歳なるが故に特筆したのである。したがって王榮祖伝からは、かれの従軍した征戦の年次を明確にすることはできない。

＊ 池内『金末』において、己丑を辛卯の誤り、という風に簡単に片づけてしまったのは、遼東出征の年次を〝王珣の死後、即ち太祖十九年(一二四)正月以後〟より辛卯(一二一)までの間とした上で、さらに太宗二年庚寅(一二〇)と断定するための前提であった。しかし、かれの伝にとって最も重視されている敘位の歳を、立論の都合によってほしいままに変改することはゆるされないであろう。

つぎに元史一九四移剌買奴伝を見るに、

庚寅。命攻高麗花凉城。……進攻開州。……遂下龍宣雲泰等十四城。

とある。これについて池内『金末』が「終末の一句は太宗三年辛卯の高麗征伐に関するものなるが、其の前年なる庚寅には征麗の役はなかりしこと、高麗には花凉城といふ城なきこと、此の城を抜きたる後、移剌買奴の進みて攻めたる城が今の鳳凰城に比言すべき開州なること等を合せ考ふれば、太宗二年庚寅に懸けて記るされたる此の事実は、撒里台の遼東経路の際に於ける一軍の行動を伝へしものなるべし」と論ぜられたのは、まさしく正鵠を得たものと言わねばならぬ。ここでは遼東と高麗の遠征がつづいて述べられており、さらに高麗侵入の年次を欠いていることを注目しておきたい。

さらに元史〇一二吾也而伝においては、

太宗元年、入覲。命與撒里荅火里赤、征遼東下之。三年、又與撒里荅征高麗、下受開龍宣泰葭等十餘城。高麗懼請和。

と記す。ここでは征麗を正しく太宗三年と示すが、遼東出征の年は明らかでない。池内『金末』の説くが如く〝吾也而伝の文は吾也而の入覲の年のみを明記し〟て、遼東出征の年を脱漏したと解することもできよう。あるいは遼東への出征が、太宗元年からおこなわれた、と解することもできるわけである。

しかも注意すべきは、吾也而 Üyer の下した城名である。その十余城のうち「龍・宣・泰・葭」とある城名は、さきの移剌買奴伝における「龍・宣・雲・泰などの十四城」と、三つまで相通ずる。これらが、いずれも高麗の州名を示したものであることは、後段に論ずる如く明らかである。また吾也而伝の「開」は、移剌買奴伝と同じく池内『蒙古の高麗征伐』(以下『征伐』と略記)が説くように〝金の開州……なるべければ、これは高麗征伐の行はるる以前、撒里台の略取したる城を混同して記したるもの〟に違いない。しからば、この「開」州の前に挙げられた「受」は、さきの移剌買奴伝の例に徴しても、同じく遼東にあったものと解するのが自然である。ところが池内『征伐』では〝受は恐らく義の通音なる愛の誤りにて、即ち咸新鎮ならん〟とされた。これは無理な見解であり、とうてい従うことはできない。*

* 吾也而伝における「受」について、何ゆえに池内『征伐』(および『金末』)が、このように無理な解釈をあえて施したのか。それは後段において改めて論ずるように、辛卯の歳における蒙古の第一次征麗の戦果を、移剌買奴伝にもとづいて「十四城」に確定しようとされたためである。

移剌買奴伝が「十四城を下す」と記しているのは、かれの率いる軍が高麗において攻陥した城の数を挙げたものであろう。そして高麗へ入る前、その軍は遼東において花凉城および開州を下していた。遼東へ攻め入った年は庚寅(一二一〇)である。吾也而は太宗元年(一二九)もしくは翌年に、撒禮塔にしたがって遼東を攻め、つづいて三年(一二一一)から高麗を征した。そして遼東および高麗において「受・開(および)龍・宣・泰・葭などの十餘城」を下したのである。この両伝において、あるいは遼東の城を「高麗の花凉城」と誤記し、あるいは「十餘城」をまとめて列記しているのは、すくなくとも此の両人が遼東から高麗への出征につづけて従軍していたことを示すものであろう。撒禮塔もまた、同様に遼東から高麗へと進んだのではあるまいか。このことは、元史一四九耶律留哥伝を見るに及んで、いっそうはっきりと

してくる。

耶律留哥伝には、長子の薛闍 Seje の伝を付載しているが、そのなかに次のような記述がある。

己丑。従太宗南征、有功。……庚寅。帝命與撒兒台東征。收其父遺民、移鎮廣寧府、行廣寧路都元帥府事。自庚寅至丁酉、連征高麗東夏萬奴國、復戸六千有奇。戊戌。薛闍卒、年四十六。

まず己丑(一二九)に「太宗に従って南征」というのは、もちろん金国への進攻を意味する。ところが〃太宗の南征、即ち金に対する親征は、庚寅の年より始まりたることなれば、己丑は庚寅の誤りなるべし〃(池内『金末』)と考えるべきであろうか。征金の彼は庚寅の春より始まる。しかも征金の議は己丑八月、太宗の即位と共に決せられた。したがって耶律薛闍は己丑に南征の命を受け、さらに軍を南下せしめたものであろう。翌年には太宗みずから軍を進める。ここにおいて薛闍は「功あり」、恩賜すこぶる多かった。

同じ庚寅の歳、薛闍は撒禮塔とともに「東征」を命ぜられた。おそらく東征の軍容を強化する必要あって、薛闍の軍を差向けたのであろう。このように解することができる以上、〃薛闍が又た太宗の命を受けて撒里台と共に東征したりとすれば、そは必ず次の年なる辛卯ならざるべからず〃(池内)として、ことさらに史料が示す年次を改めるには及ばない。まして〃庚寅東征の紀年に誤りあること益々明らかなり〃として、伝にいう〃東征は必ず遼東の役にはあらじ〃(池内)と断ずることはできないであろう。

むしろ薛闍伝の記述から私は、撒禮塔を主将とする遼東経略が、やはり移剌買奴伝も記すごとく庚寅の歳にあったと推定したいのである。また遼東出征のことは本紀に見えない。それは遼東の平定が当時の蒙古によって、とくに重視されてはおらず、翌年に始まる征麗の前提にすぎなかったことを示すものではあるまいか。薛闍伝にも「庚寅より丁酉(一二一七)に至るまで、高麗・東夏の萬奴の国を連征」と記し、遼東の語を挙げない。これまた遼東への出征が、征麗

のなかにふくまれて考えられていたことを示したものと言えよう。吾也而伝や移剌買奴伝における表現も、同様の趣旨によるものであった、と考えられる。*

* 池内『金末』においては、薛闇伝の連征のなかに遼東を示していない故に、庚寅を征麗の初年たる辛卯の誤りと断じた。しかし伝にいう「東征」は庚寅より丁酉までを示すと解するのが自然であって、わざわざ遼東の役を除く必要はない。したがって「東征」により、高麗の領内にあった「其の父の遺民を収め」たことも、〃必ず辛卯以来の事〃であるには違いないとしても、〃之を庚寅以来となせるは正しからず〃と論ずる必要もないであろう。とにかく私は、史料の示す紀年は、その誤りを決定づける別の史料がない限り、みずからの所論のために変改することは避けたいと考えるものである。

二

撒禮塔を主帥とする蒙古の軍は、遼東を平定した後、鴨緑江をわたっていよいよ高麗への侵入を開始した。その時期をこまかく示す史料が、冒頭に引用した高麗史高宗世家の文である。

〔辛卯十八年。秋八月〕壬午。蒙古元帥撒禮塔、圍咸新鎮、屠鉄州。

この八月壬午(九日)という日付は、咸新鎮*すなわち義州の囲まれたときを示すものか。それとも鉄州の陥落したときを示すものか。この記事だけでは明らかでない。

* 高麗史 五八 地理志に明示される如く、義州は高宗八年(一二二一)以来、咸新鎮と称していた。当時の州鎮が今日のどこに当るかについては、津田左右吉『朝鮮歴史地理』第十五章および第十八章、また『満洲歴史地理』第二巻に収められた箭内亙『満洲に於ける元の疆域』などで詳しい考証が試みられている。先学の研究によって異論のないところは煩を避け、本稿では（　）内に現在の地名を示すにとどめたい。

ときに防戍将軍として咸新鎮にあったのが、趙叔昌であった。その父の趙冲は、かつて西北面元帥たり、高宗六年

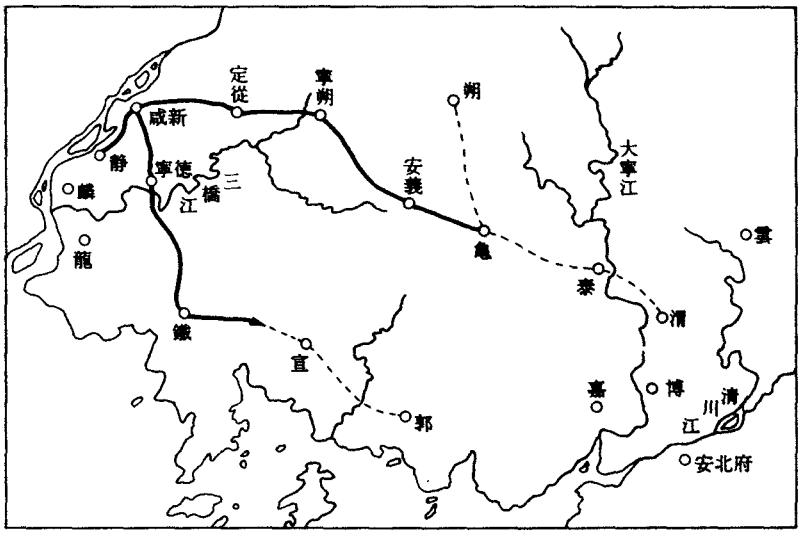
(一二九)に蒙古の来進をみたとき、蒙古の元帥と協力しつつ、領内に侵入していた契丹兵を討滅する功を立てた。いま再び蒙古が来り、鎮を囲むに及んで、冲の子の叔昌は、城を以て降った。かつ蒙古人に告げて曰く、我は趙元帥冲の子なり、吾が父かつて貴国の元帥と約して兄弟となる、と。副使の全僩は倉を発して蒙古軍に餉した。叔昌は、朔州(平安北道朔州郡)・宣徳鎮(?)に書をおくって降を勧めた。蒙古人は、その至るところで叔昌を先に立て、真の蒙古なり、宜しく亟かに出でて降るべし、と呼ばわしめた。こうして鉄州(平安北道鉄山郡)の城下に至った。

以上は、高麗史一三〇(叛逆列伝四)趙叔昌伝、および高麗史節要一六高宗十八年八月の条に録するところである。ここで叔昌が書をおくったのは朔州と宣徳鎮と記されているが、それが果して二城のみであったのか、また何故に此の二城のみに書をおくったのか、いずれも明らかではない。宣徳鎮も、どこにあったのか、不明である。*

* 宣徳鎮の名は、高麗史世家および列伝にしばしばあらわれるが、地理志および兵志にはあらわれていない。よって池内『金末』では、これを「寧徳鎮」の誤りとされた。そうすれば義州に近く、東国輿地勝覧の義州の条には、州の東南四十里にあり、と記されている。また高麗史の高宗世家四年の条に「(契)丹兵、義・静・麟三州および寧徳城の界に入る」とあるところからも、寧徳鎮の位置が高麗の西北境に位置したことが認められよう。しかし私としては宣徳鎮を、他に傍証なく寧徳鎮の誤りとすることに、なお躊躇をおぼえる。現在のところでは疑問のままに残しておきたい。

高麗史一一二(忠義列伝)文大伝および節要によれば、文大は郎将として瑞昌県にあった。それが蒙古兵に虜えられ、鉄州城下に至った。文大をして州人に呼びかけ、真の蒙古兵きたれり、速かに出でて降るべし、と諭させた。そこで文大は呼ばわって曰く、仮の蒙古兵なり、且に降ること勿れ。蒙古人は斬ろうとしたが、更に呼ばわせた。復た前の如くであった。遂に斬った。

この瑞昌県の位置も明らかでないが、文大伝の記すところからみれば、義州より鉄州に至る間に置かれたものであ



ろう。その道は、義州より東南に進み、いまの白馬山城に擬せられる寧徳鎮をへて、さらに東南行すれば、鉄州に達する。

さて鉄州において、蒙古は城を攻めること甚だ急であった。城中ついに糧も尽き、守ること克わず、城まさに陥らんとした。判官の李希勣は、城中の婦女や小児を倉の中に納れて、これに火をかけ、丁壮を率いて自刎して死んだ。蒙古兵は、ついに鉄州の城を屠った。

こうして鉄州は陥った。ときに分道将軍として、静州を守ったのが、金慶孫であった。静州は義州の南二十五里のところと伝えられ（東国輿地勝覧）、義州より鴨緑江の東岸を下れば、静州・麟州をへて三橋川をわたり、龍州に達する。しかるに高麗史○一三金慶孫伝には「蒙古兵は鴨緑江を度り、鉄州を屠り、侵して静州に及ぶ」と伝える。この書きかたは、日時の上から見ても、位置の点から見ても、正確とはいえないであろう。静州は、鉄州から軍を回すようなところにないことは、明らかである。おそらく鉄州の陥落を告げる報の後に、静州の侵犯が報ぜられたので、この

ような表現がとられたものであろう。そうして鉄州につぎ、静州が侵されたという以上、義州から東南して鉄州を衝いた軍のほかに、義州から南して静州に至った軍のあったことを示している。

蒙古が至るや、金慶孫は衙内の敢死の士十二人を率い、門を開いて出でて力戦した。蒙古兵は却走したが、俄かにして大軍が継いで至る。州人は守る能わずと度って、みな奔竄し、慶孫が城に入るも一人も在るものがない。独り十二士と山に登って夜行し、火食せざること七日で、亀州に到った。

やがて「蒙兵は亀州に至る」(節要)。高宗世家には、九月「丙戌、蒙兵は亀州城を圍む」と記す。すなわち亀州が囲まれたのは、九月三日(丙戌)のことであった。これにさきだって金慶孫は亀州へ入城したに違いない。しかも静州から亀州まで七日を要したというから、静州の陥落は八月二十六日以前のこととなるであろう(八月は大の月)。

ここで再び本節の冒頭に引用した高宗世家八月壬午(二十九日)の日付に注目したい。静州の陥落が八月二十六日より前であったとすれば、咸新鎮を囲んだのは、さらにそれより以前のことであった、と考えられよう。したがって八月二十九日という日付は、鉄州の陥落を示したもの、と考えられるわけである。

咸新鎮より亀州(平安北道亀城郡)に至るには、まず東し、さらに東南へ進む。静州へむかうのとは全く別の方向であるから、亀州へ進んだ蒙古軍は、さきの静州および鉄州へ進んだのとは別の部隊でなければならぬ。すなわち蒙古軍は、まず咸新鎮を降した後、すくなくとも三つの部隊にわかれ、所在の城鎮を屠っていったものであろう。

高麗史[三]高宗世家一の高宗三年(一二一六)八月の条には契丹兵の侵寇を記して「乙丑(十四日)鴨緑江を渡って、寧朔・定戎の境を侵す」、さらに辛未(二十日)には「丹兵すでに寧徳城を屠り、進みて安義亀三州を囲む。また兵あり、麟・龍両州の界より来り、鉄・宣二州を攻む」と記す。また同三一〇金就礪伝にも高宗三年に契丹兵が「鴨緑江を渡り、寧朔などの鎮を攻め、……また明日、義・静・朔・昌・雲・燕などの州、宣徳・定戎・寧朔の諸鎮に闖入」と記している。

また輿地勝覧によれば、義州の東八十里に定従鎮、同じく東百二十里に寧朔鎮、亀州の西北七十里に安義鎮が置かれていた。高宗世家に「安義亀三州」とあるのは必ずや誤りであって、安義鎮と亀州をさしたものであろう。そうして、このたびの蒙古軍も、かつての契丹兵と同じように、義州から定戎・寧朔・安義の諸鎮をへて、これを撃破しながら亀州へ達したものに違いない。契丹兵の場合には、寧朔・定戎の境より亀州に至るまで六日を要している。蒙古軍もほぼ同じ程度の日数を要したと見られるから、金慶孫伝に掲げられた「七日」という日数とも符合する、といえよう。

三

いまや蒙古軍は亀州城を囲んだ。亀州において高麗の将兵は、城を固守して退かず、最後まで果敢に抗戦した。その勇戦のさまは、高麗史一〇三朴犀伝、同じく金慶孫伝に詳しく伝えられている。朴犀は西北面兵馬使であった。これに朔州分道将軍の金仲温が「城を棄て来奔する」。また、さきの金慶孫や、静・朔・渭(平安北道渭原郡)・泰州(平安北道泰川郡)の守令等が「おのおの兵を率いて、亀州に会した」。高麗史節要は、同年九月における攻防の模様を、次の如く述べている(内容は列伝も同じ)。

「犀は仲温の軍を以て城の東西を守らしめ、慶孫の軍をして城の南を守らしめ、都護別抄および渭泰州の別抄二百五十余人をして、分ちて三面を守らしむ。蒙兵、大いに南門に至る。慶孫、静州衙内の敢死の士十二人および諸城の別抄を率い、城を出でて将に戦はんとす。慶孫、士卒を前ましめて令して曰く、爾等、国の為に身を忘れ、死するも退かざる者は右せよと。別抄は地に伏して応ぜず。悉く還りて城に入らしめ、〔独り十二士と進み戦ふ〕(〔〕内は節要に欠く)。蒙兵、先鋒の黒旗を手射し、一騎すなはち斃倒す。敢死の士、之に因りて奮戦す。流矢、慶孫の臂に中り、血淋漓たる

も、手鼓して止まず。四五合に至り、蒙兵却走す。慶孫は陣を整へ、雙小笒を吹きて営に還る。犀は迎拜して泣き、事みな之に委す。

「蒙兵、城を圍むこと数重。日夜、西南北門を攻む。官軍突出し、撃ちて之を走らす。蒙兵、渭州副使朴文昌を擒へ、城に入りて降を諭さしむ。犀、之を斬る。蒙兵、精鋭三百騎を抽きて、北門を攻む。犀、撃ちて之を却く。蒙兵、車に草木を積み、輾して進み攻む。慶孫、砲車を以て鉄液を溶し、以て之に瀉ぎ、其の積草を焼く。蒙人、却走す（この一行、犀伝に欠く、朴）。更に樓車および木床を創り、裹むに牛革を以てし、中に兵を蔵し、城底に薄りて、以て地道を穿つ。犀は城に穴ほりて鉄液を注ぎ、以て樓車を焼く。地且つ陥ち、蒙兵の圧死する者三十余人。また朽茨を爇きて、以て木床を焚き、蒙人錯愕して散ず。蒙人また大砲車十五を以て城南を攻むること、甚だ急なり。犀また台を城の上に築き、炮車を発し石を飛ばして之を却く。蒙人、薪を人膏に漬けて厚く積み、火を縱ちて城を攻む。〔犀〕水を灌ぎて之を救ふ。其の火いよいよ熾なり。犀、泥土を取り水に和して之に投ぜしめ、乃ち滅す。蒙人また車に草を載せて爇き、以て譙樓を攻む。犀、預め水を樓上に貯へて之に灌ぎ、火焔尋いで息む。

「慶孫、胡床に拠りて督戦するに、砲あり、慶孫の頂を過ぎ、在後の衛卒を撃ちて、身首糜砕す。左右、床を移さんと請ふ。慶孫曰く、不可なり、われ動けば則ち人心も動かんと。神色自若たり、竟に移らず。

「蒙兵、城を囲むこと三旬、百計之を攻む。犀、輙ち機に乗じ変に応じて以て固守す。蒙兵、克たずして退く。」*

* 亀州城の攻防に関する高麗史（および節要）の記述は、以上に引用した如く、まことに精彩に富む。おそらくは高麗史において、最も躍動した叙述に属すると言えるであろう。しかも、ここに伝えられた攻防の秘術を、戦史の上から見るときも興味ふかい。さまざまに展開された守城の戦術は、朴犀や金慶孫の天才に負うところが大きいであろうが、同時の高麗の戦争技術もここまで発達していたことを示している。さらに注目されるのは、引用文の冒頭にあらわれた「別抄」である。この別抄については、池内『高麗の三別抄について』（満鮮史研究、中世第三冊所収）に、くわしい考証がほどこされている。この論文

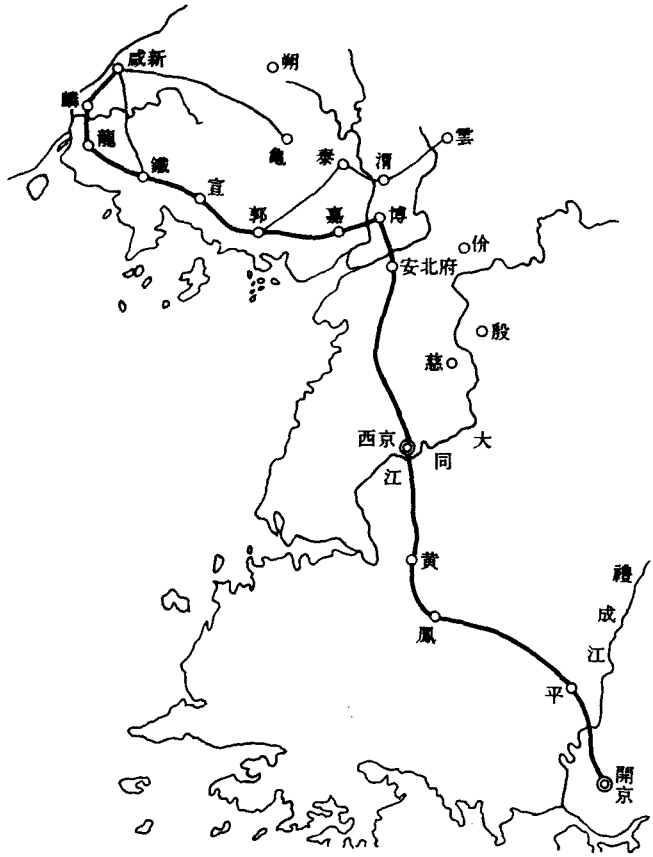
のなかで、地方の州県に「別抄」という軍隊のあったことが指摘され、それは〝州県軍たる各地の民兵の中から抄出組織せられたものにちがひない〟と論ぜられた。別抄については改めて論ずるから、ここでは「諸城の別抄」が蒙古兵を前にして憶した、という点を指摘するのみにとどめておく。侵略に対して、真に高麗の国土と民族を守ろうとした者が、どういう人びとであったのかという重大な問題の一端が、ここにあらわれていると考えるからである。

このように蒙古軍は亀州城を攻めること三十日に及んだが、ついに抜くことができなかった。攻撃の開始が九月三日であったとすれば(高宗世家)、すくなくとも九月いっぱいは亀州に釘づけになっていた、と見なければならぬ。ところが高宗世家は、九月「癸巳、蒙兵は西京城を攻めて克たず」と伝える。九月十日には西京城、すなわち平壌に達していた蒙古軍があったわけであって、これは亀州を囲んだものとは別軍であったに違いない。あるいは亀州を囲んだ軍の一部を割いて、西京へ向わせたとも考えられようが、亀州の攻防のさまを見るに、それだけの余裕はなかったと考える方が自然であろう。

蒙古軍のなかには、さきに鉄州へ向ったもの、および静州へ向ったものがあった。その一部は亀州へも助勢にまわったかも知れぬが、主力は長駆して西京を衝いたのであろう。いち早く戦局を決せんがためである。鉄州から西京まで、途中いくつもの州鎮があるが、この部隊は城へ籠ったものをあえて攻めることを避け、ひたすら道を急いだものに違いない。鉄州を陥れたのが八月末であり、西京に達したのが九月十日であったという日程も、この部隊が大きな戦闘をまじえずに急行したらしいことを語っている。

しかも西京城を攻めて克たなかった。蒙古軍は、そのまま大同江をわたって黄海道に入り、黄州および鳳州に至った。高宗世家は「丁酉、蒙兵は黄鳳州に至る。二州の守は民を率い、鉄島に入りて保つ」と伝える。これは九月十四日であり、その進撃は驚くべき速さであった。二州の守令は戦わずして、大同江中の鉄島に難を避けたようである。

蒙古軍の南下に対して、もちろん高麗の朝廷も迎撃の態勢をととのえつつあった。



いうまでもないことながら国王の高宗は虚位を擁するに過ぎず、文武の実権をにぎる者は権臣の崔瑀（怡）である。高宗世家によれば、九月二日には三軍の進発を決したとして、「九月乙酉、宰相は崔瑀の第に会し、三軍を出だし、以て蒙兵を禦ぐを議す。大将軍蔡松年を以て北界兵馬使と為し、また諸道の兵を徴す」とある。そして「壬辰、三軍啓行」、すなわち九日を以て三軍は出発した。

高麗史一二九 崔怡伝によれば、このとき各地の草賊が進んで従軍を申入れたことが注目されよう。すなわち「馬山の草賊の魁（節要には魁二人と記す）自ら降り来り、怡に詣りて曰く、請ふ精兵五千を以て助撃せんと。怡大いに喜び、賞賜すること甚だ厚し」とあるほか、節要によれば数日の後と考えられるが（九月十四日の記事の次に録す）、「怡また人を遣はし、廣州の冠岳山の草賊の屯所に往かし

め、賊魁五人、精鋭五十人を誘致し、厚く賞して以て右軍に充つ」と記している。

武人政権の下において、かねてから農民の一揆は各地に起されていた。それは時として部曲や奴婢の階層とも結び、大規模な反乱へと発展したことも少なくなかった。十二世紀の末に崔氏政権が確立してから後も、屢次にわたる徹底した鎮圧にも拘らず、あくなき誅求に対する抵抗はやまなかった。時の権力に敢て刃向うが故に、かれらは草賊と呼ばれた。そうした草賊、すなわち常には一揆を以て権力と戦っていた人びとが、国難にあたって、官兵と行を共にしたのである。蒙兵の侵略に対して、高麗人民の抵抗の気勢がいかに高いものであったか、この一事がよく示している。

さて高麗の三軍は九月下旬、黄州の洞仙駅に達した。ここで八千余の蒙古兵と遭遇したのである。高麗軍は大いに戦って蒙古兵を撃退したが、このときの戦闘を高宗世家は録していない。したがって日付を明らかにすることができない。ただし高麗史節要が、史一〇三李子晟伝と同様の記事を、九月二十日と二十九日の間に掲げているところから、二十日以降であったことが推定されるわけである。戦闘の模様は、李子晟伝（および節要）によれば、次の如くであった。

「三軍……洞仙駅に屯す。會々日暮れ、諜者は賊變なきを報ず。三軍、鞍を解きて息ふ。人あり、山に登り、呼びて曰く、蒙古兵（狄兵節要）至ると。軍中、大いに驚きて、みな潰ゆ。蒙古兵八千余人、突として至る。（上将軍）子晟および将軍李承子、盧坦等五六人、殊死して拒ぎ戦ふ。子晟は流矢に中り、坦は槊（槍）に中りて馬より墜つ。兵ありて之を救ひ、僅かに免かる。三軍始めて集り、ともに戦ふ。蒙古兵稍く却き、復た来りて我が右軍を撃つ。散員李之茂、李仁式等四五人あり、之を拒ぐ。馬山の草賊の軍に従へる者二人、蒙古兵を射るに、弦に應じて仆る。官軍、勝に乗じて撃ち之を走らす」。

こうして上将軍の李子晟をはじめ、将兵こぞっての決死の奮戦によって、ついに蒙古軍を撃退した。馬山（平安北道亀城郡）の草賊の働きが特筆されていることも注目されよう。いまや高麗の三軍は、勝に乗じて安北府（平安南道安州）にむかって北上する。

四

さて高宗世家は九月癸卯（二十日）にかけ「北界馳報す。蒙兵、龍州を圍む。城中、降を請ひ、副使魏珺は携へらる」との記事を掲げる。この龍州（平安北道龍川郡）は鴨緑江の河口に近く、咸新鎮（義州）にもきわめて近い。すでに蒙古軍は亀州を攻めること三旬、また一部の軍は鉄州をへて黄海道に達しているという時期に、はじめて龍州が囲まれたというのである。これは必ずや、撒禮塔みずからが率いる本軍の行動を伝えたものであろう。すなわち撒禮塔は、先鋒の部隊を数手に分けて、ふかく高麗の領内に攻めこませ、みずからは一カ月近く遅れて、悠々と進撃したものに違いない。

こう考えれば、本軍は咸新鎮より、静州、麟州をへて、龍州に達した、と認めることができよう。さらに高宗世家によれば、九月「壬子、蒙兵、宣郭二州を陥る」とある。宣州（平安北道宣川郡）および郭州（平安北道定州郡）は、鉄州より安北府をへて西京（平壌）に至る途上にある。その道は、すでに九月十日、西京を衝いた先鋒部隊が通ったところである。その宣州および郭州が、九月二十九日（壬子）に始めて陥った、というのであるから、これもまた本軍の行動を伝えたものと考えざるを得ない。すなわち本軍は、龍州を陥れた後、鉄州をへて、先鋒部隊が手をつけずに通過していった宣州や郭州などを、ひとつひとつ陥れていったものであろう。

ここで、さきに挙げた元史の移剌買奴伝および吾也而伝の記述に、再び注目したい。移剌買奴は高麗の領内におい

て「龍宣雲泰等の十四城を下し」ている。また吾也而は「受開龍宣泰葭等の十餘城を下し」ている。このうち龍州と宣州は、いま述べたように本軍が陥れたものと考えられるから、移剌買奴も吾也而も、撒禮塔の本軍と行動を共にしたもの、と認められよう。両伝には、もう一つ共通して泰州(平安北道泰川郡)の名があらわれるが、ここは亀州の東方にあり、すなわち本軍の全体か、あるいは移剌買奴および吾也而の率いる部隊が、郭州を陥れた後、東北に向って泰州を陥れたことを示している。そうして移剌買奴の軍は、さらに東北方へ進み、雲州(平安北道雲川郡)まで陥れたものに違いない。

ところで撒禮塔の本軍は、後段に述べる如く、十月二十一日には安北府に達していた。郭州から嘉州(平安北道博川郡)・博州(同上)をへて南下し、清川江を渡れば、安北府である。その間の移動に二十日余を要しているところから見れば、未だ陥落していない北界の諸城の攻略にしたがっていたと考えられる。泰・雲の攻略も、この間のことであろう。

吾也而伝に挙げられた「葭」州は、高麗史にその名が見えない。されば池内『征伐』では〃葭は詳かならず、雲の誤にてもあるべきか〃とされたが、もとより何の根拠もない。しかし「葭」(jia)は〃嘉〃(jia)と音通であるところから見れば、これは郭州と博州との間に位する嘉州をさしたもの、と考えるべきであろう。

さらに吾也而伝において、その下した十余城の冒頭に掲げられた「受」州を、池内『征伐』が咸新鎮(義州)とされたことについて、重ねて触れておこう。受を〃義の通音なる愛の誤り〃とする解釈は、前述した如く余りにも無理である。しかも吾也而の行動を見れば、本軍に属していたと考えられるから、義州すなわち咸新鎮の攻略にしたがったとは認められない。咸新鎮の地を踏んだのは、先鋒軍が攻陥してから一カ月近くも後のことであった。

なお本軍が龍州へ向って発した後、咸新鎮には少数の守備兵を残したのみであったらしい。高麗史節要には十月の壬戌(十日)以前のこととして、咸新鎮よりの報を掲げている。高麗史〇一三趙叔昌伝にも、鉄州の陥落(八月二十九日)の後「未

だ幾くもあらず」として、同様の報告を載せているが、これは節要の日付に従うべきであろう。さて、その内容は――

「咸新鎮、報じて曰く、国家若し舟楫を遣さば、我まさに盡く城に留まる蒙人の小尾生等を殺し、然る後に城を卷き、舟に乗って京に如かん、と。乃ち金永時等三十人に命じ、舟楫を具して以て送る。果して蒙人を殺し、幾ど尽く。小尾生は先に覺りて亡げ去る。副使全僩、吏民を率い、入りて薪島を保つ。後、僩は家を挈げて舟に乗り、京に還り(還らんとして)溺死す」。

咸新鎮では、防戍将軍の趙叔昌が蒙古の先鋒軍と共に去った後、副使の全僩が守城の責任を負っていた。しかも蒙古の戦法は、精悍な騎馬の密集部隊を以て、つぎつぎに目ざす城邑を屠ってゆく。疾風の如く過ぎ去るのであるから、屠った後の城邑には殆ど兵を遺さない。しかし咸新鎮は、国境の重要な城邑であるから、若干の将兵を置いたのであろう。そこを全僩ら、いったんは降伏した高麗の戍兵が乗じたのであった。蒙古兵を殺し、あるいは遁走せしめた後の咸新鎮が、どのようなことになったか、記録の伝えるところはない。ともあれ鎮の吏民は、蒙古人の報復を怖れて、鴨緑江上の島に避退した。

州鎮をすて、吏民こぞって海島に遷移することは、この後も高麗人が執った抵抗の一形態であった。蒙古の騎馬部隊は海を渡ることができない。海島に逃げこんでしまえば安全であった。そうして北界に属する諸州鎮が、殆ど蒙古軍の陥れるところとなった後も、最北端の咸新鎮から開京まで連絡することができたのも、沿海を舟行する道が確保されていたからに他ならない。

さて咸新鎮、静州と、龍州との間に位置するのが、麟州である。都領として麟州にあったのが洪大純(元史では洪大宣)、その子の洪福源である。父の大純は、さきに高宗五年(一二一八)、高麗領内に侵入した契丹兵を討つべく、蒙古が兵を進めたとき、蒙古軍を迎えて之に降った。さらに子の福源は、このたびの蒙古侵寇に際し、また投降したのである。その

時期は高宗十八年(一二三一)九月、撒禮塔の本軍が静州より麟州に進んだときであろう。

洪福源の降附については、諸種の史料がこれを録している。まず、経世大典の一編をなす元高麗紀事には、

〔太宗〕三年九月、上命將撒里塔火里赤、領兵爭討。國人洪福源迎軍投降、附近州郡亦有来帰者。

と記す。これに拠った元史二〇八高麗伝には、さらに詳しく「太宗三年八月、撒禮塔に命じて其の国を征す。国人洪福源、迎へて軍に降る。福源が率いる所の編民千五百戸を得、旁近の州郡も亦た来帰する者あり」と記した。また元史一五四洪福源伝には、

辛卯、秋九月。太宗命將撒里答討之。福源率先附州縣之民、與撒禮塔併力、攻未附者。

とあって、蒙古に対する福源の忠勤ぶりが、よく窺えるであろう。一方、高麗史一〇三洪福源伝の記述は、

〔高宗〕十八年、撒禮塔大擧入侵。福源又迎降于軍。

とある如く、簡単である。ここで「又」という表現を用いているのは、父の大純の「迎降」を承けたものに他ならない。すなわち同伝の冒頭には大純の迎降を次のように記す。

「洪福源、初名は福良。本と唐城の人なり。其の先、徙りて麟州に居る。父の大純は麟州の都領たり。高宗五年、元は哈真、札剌を遣して、契丹の兵を江東城に攻む。大純、迎へ降る」。

同様の記述が、元史の洪福源伝や高麗伝にもあり、元側の記録では大純の名が、すべて大宣となっている。ここには元高麗紀事の文を掲げておこう。*

〔太祖皇帝〕十三年、戊寅。上遣哈只吉、劄剌等、領兵征之。高麗人洪大宣詣軍降、與哈只吉等一同圍攻。

* 元史高麗伝の記述は次の通り——

十三年、帝遣哈只吉、劄剌等、領兵征之。國人洪大宣詣軍中降、與哈只吉等同攻圍之。……

元史洪福源伝の記述は次の通り――

父大宣、以都領鎮麟州、福源為神騎都領、因家焉。……戊寅、冬十二月。太祖命哈赤吉、札剌、將兵追討。大宣迎降、與哈赤吉等共擊之、降其元帥趙忠（→沖）。

以上の記述のうち「征之」あるいは「擊之」とあるのが、江東城に拠った契丹兵を征したことをさすのは、いうまでもない。なお大宣と大純とは、音通である。

これらによって見れば、洪大純は高宗五年(一二八)、蒙古軍を迎え降り、これに協力したことは明らかである。そうした因縁があった故に、洪福源もまた蒙古軍が大挙して侵攻し来るや、これを迎え降ったものと考えられる。同様の事例は、趙叔昌の場合にも見られるであろう。然るに池内『征伐』においては、とくに論を立て、高宗五年の大純迎降の事実を否認する。それは元史洪源福伝の記述に二、三の誤りあることを指摘した上、併せて大純の迎降という事実にも及んだのであった。すなわち〃……哈真・札剌の来征するや、彼等は義州を過ぐる通路に由らず、高麗の東北面より直ちに江東城下に至りしことなれば、従来蒙古と関係なき大宣が、全く方面を異にする麟州より来りて迎へ降れりといふは、到底信を措き難く、これも誤伝なりとせざるを得ず。……要するに大宣父子は麟州に居り、撒里台の軍の咸新鎮（義州）より鉄州に向ひし時、之を迎へて降れりとなすべきなり。〃

かくの如く論ぜられたのであるが、論拠は極めて薄弱と言わざるを得ない。元側の文献にも、高麗史にも、互に何の矛盾もなく明示されている事実を、何を以て否認しなければならないのか、諒解に苦しむ程である。

但し洪大純の迎降は、必ずしも高麗の国益に反したものではなかった。このとき高麗は蒙古と兄弟の約を結び、その力を仮りて契丹兵を誅滅し得たのである。しかしながら洪福源の降附は、明らかに反逆であった。ただ降附したのみではない。侵寇の軍に協力し、鋒を転じて自国の「未附の者」を攻めたのである。この後、福源は全く蒙古の側に立って高麗を苦しめるために働き、その子の茶丘は世祖フビライに信任せられて、日本への遠征には副元帥として従

軍したこと、よく知られる通りである。

五

九月下旬、おそらくは洞仙駅の戦闘と前後するころ、撒禮塔は高麗朝廷に牒をおくった。ところが、その使者二人は平州(黄海道平山郡)において抑留された。このことは直ちに朝廷に報ぜられたが、高宗世家(および節要)は十月一日にかけて次のように録している。

「冬十月癸丑朔、蒙古二人、牒を持ちて平州に至る。州即ち之を囚へ以て聞す。朝議紛紜たり。或は殺すべしと云ひ、或は當に其の由を問ふべしと云ふ。乃ち殿中侍御史金孝印を遣はし、往きて問はしむ。其の牒に云く。我が兵の初めて咸新鎮に至るや、迎へ降る者は皆な殺さず。汝の國、若し下らざれば、我れ終に返らざらん。降れば則ち當に東真に向って去るべし、と」。

こうして使者二人は、王京に押送することとなった。王京に着いたのは十月二十日(壬申)のことである。これについて高宗世家は次のように述べる。

「壬申、郎将池義深、平州にて囚ふる所の蒙古二人を押して京に到る。一は是れ蒙古人、一は是れ女真人。此れより國家は始めて蒙古兵なるを信ずるなり」。

のち十二月に至り、高麗の朝廷が降伏を決するや、さまざまの弁明を蒙古に対して試みている。そのうち十二月二十九日(庚辰)、高宗より蒙古皇帝に上った奉文の一節に、次のような文のあることが注目せられよう。すなわち——

「また阿土等の縛紐の事。初めは意はざりき、結親の大國にして、乃ち故なく暴を小邦に加へんとは。寇賊の来侵に擬し、軍師を出だして方に戦ふ。忽ち二人あり、我が軍に突入す。癡軍士、甚しくは考問せず、捕へて平州に送る。

平州の人、其の逋逃を恐れ、略々鏁杻を加へ、朝廷に申覆す。朝廷、譯を遣はして察視するに、其の語は頗る上國に類す。然る後、械を解きて慰訊し、兼ねて衣物を賜り、譯に随ひて前去せしむ。則ち初めは不明の致す所と雖も、其の實は亦た之を恕すべし」。

ここに述べられたところは、まさしく弁明そのものと考えられるけれども、使者の一人が阿土という名の者であったことは明らかであろう。この阿土は、十二月二日にも撒禮塔の使者として再び王京に使するのである。*

* 池内『征伐』においても、平州における使者抑留の事件について論ぜられ、とくに注を付して、次のように述べられた。すなわち「……高麗の政府は、平州にて執はれたる二人の使者の開京に送致せらるる時まで、今回の入寇者の蒙古兵なるを知らざりしといふ。……高麗の政府が如何に迂闊なればとて、かくの如きことは断じてあるべからず。……しかも蒙古の侵入を他の寇賊のそれに擬せりといふは、弁明の為めの虚妄なること疑ひなし。」

さきに洞仙駅で蒙古軍を破った高麗の三軍は、十月二十一日（癸酉）には安北府に達していた。高宗世家は癸酉の日付にかけて「是の日、三軍は安北城に屯す。蒙兵、城下に至りて戦を挑む」と記す。こうした戦闘経過から見ても、さきに高麗の三軍と戦って敗れた八千余の蒙古兵は、先鋒部隊であったことが、うかがえるであろう。勢いにのって北上した三軍も、いまや蒙古の本軍と対決せざるをえなくなったわけである。この日の戦闘状況は、次の如くであった。

「三軍、出でて戦ふを欲せず。後軍の陣主大集成、之を強ふ。三軍、出でて城外に陣す。陣主、知兵馬等は皆な出でず、城に登りて之を望む。集成も亦、還りて城に入る。三軍、乃ち與に戦ふ。蒙兵、皆な下馬し、隊を分ちて列を成す。騎兵あり、我が右軍に突撃す。矢の下ること雨の如し。右軍乱れ、中軍之を救ひて亦た乱れ、爭って城に入る。蒙兵、勝に乗じて之を逐ひ、殺傷すること過半なり。将軍李彦文、鄭雄、右軍判官蔡識等、之に死す」。

ここにおいては戦局はほぼ決し、撒禮塔の率いる本軍は安北府を占領した。高麗の朝廷も、もはや敵しがたいことを知り、和議を打診すべく使者を発したことが、高宗世家（および節要）の次の記事によって知られる。使者が王京に帰って復命したのが十一月十一日（癸巳）であった。

「癸巳、北界分台御史 閔曦、還り奏す。曦は、兵馬判官員外郎 崔桂年と、三軍の指揮を承け、往きて蒙兵を犒ふ。一元帥あり、自ら權皇帝と稱す。名は撒禮塔、氈廬に坐し、飾るに錦繡を以てし、婦人を左右に列ぬ。乃ち曰く、汝の國、能く固守すれば、則ち固守せよ。能く投拜すれば、乃ち投拜せよ。能く對戦すれば、則ち對戦せよ。速かに決したれ（速決了也）。汝の職は何たるぞ。對へて曰く、分台の官人なり。曰く、汝は是れ小官人なり、大官人遠かに来り降れ、と」。

このように折衝する旁ら、高麗は十一月二十二日（甲辰）「五軍の兵馬を加發し、以て蒙兵を禦ぐ」処置をとった。しかも撒禮塔は、安北府に屯したまま、先鋒部隊を南下せしめ、それは十一月二十八日（庚戌）、平州に達したのである。高宗世家（および節要）は述べる。

「蒙兵、平州の其の牒を持ちし者を囚へしを以て、先づ之を滅せんと欲す。庚戌、夜の未だ明けざるに、城中に突入して、州官を殺し、其の城を屠りて、盡く人戸を焼く。鶏犬一空せり」。

さらに、その翌日（二十九日）、先鋒部隊は早くも開京の近郊に達した。

「辛亥、蒙兵、平州より来り、宣義門外に屯す。蒲桃元帥は金郊に屯し、迪巨元帥は吾山に屯し、唐古元帥は蒲里に屯す。前鋒は禮成江に到り、廬舎を焚焼し、人民を殺掠すること、勝げて計ふべからず。京城、驚擾して洶洶たり」。

「十二月壬子朔、蒙兵、京城四門の外に分屯し、且つ興王寺を攻む。御史 閔曦を遣はして、之を犒ひ、和親を結

ぶ」。

ついに高麗の朝廷は屈したのである。これより蒙古軍と高麗朝廷との間には、降伏の条項をめぐって使節が往来し、さかんに文書を往復して、叱責と弁明をくりかえす。そうして和議が成立し、撒禮塔が軍を班したのは、翌年正月十一日（壬辰）のことであった。

この間の折衝、とくに文書の内容については、論すべきところがすこぶる多い。よって、和議の問題については次の機会に、改めて詳しく論述したいと思う。

六

高麗の朝廷が降服するに至っても、北界においては、なお抗戦がつづけられていた。亀州および慈州では、あくまでも屈せず。城を守りぬいたのである。

十月以降における亀州の攻防に関しては、さきの朴犀伝のほか、高宗世家も詳しく記録する。まず高宗世家は、十月二十日（壬申）以後の状況を、次の如く記した。

「蒙兵、亀州を攻め、城廓を破ること二百餘間。州人、隨ひて即ち修築し、以て守る。

「癸酉（二十一日）、蒙兵、諸城の降卒を領して城を圍み、砲を新西門の要害の處に樹つること凡そ二十八所、以て之を攻む。また城廓五十間を破毀し、越え入りて交戦す。州人、殊死して戦ひ、大いに之を敗る」。

また朴犀伝の記すところは、次の如くである。

「復た北界諸城の兵を驅りて来り攻め、砲車三十を列置して、城廓五十間を攻め破る。犀、隨毀隨葺して、鎭すに鉄絙を以てす。蒙兵、敢て復た攻めず。犀、出でて戦ひ大捷す」。

これは高宗世家における十月二十一日の記事と相応ずるものである。そうして高麗史節要が同様の記事を、十一月十一日と二十二日の記事の間に掲げているところから見れば、十月下旬より十一月中旬に至る戦況と解することができよう。つづいて朴犀伝の掲げる次の記事は、節要において十二月十四日と二十日との間に掲げられている。よって十二月中旬の戦況と解することができよう。

「蒙古は復た大砲車を以て之を攻む。犀また砲車を発し、石を飛ばして、撃殺すること算なし、蒙古退きて屯し、柵を樹てて以て守る。撒禮塔、我が國の通事池義深、學録姜遇昌を遣はし、淮安公侹の牒を以て亀州に至り、降を諭す。犀、聴かず。撒禮塔、復た人を遣はして之を諭す。犀、固有して降らず。蒙古、また雲梯を造りて、將に城を攻めんとす。犀は大于浦を以て之を迎撃し、糜砕せざるなし。梯も近づくを得ず。大于浦とは、大刃の大兵なり。……(中略)……蒙古の亀州を圍むや、其の將の年幾ど七十なる者あり。城下に至り、城壘器械を環視し、歎じて曰く、吾れ結髪より従軍し、天下の城池の攻戦の状を歴観せしも、未だ嘗て攻めらるること此の如く、而して終に降らざる者を見ず。城中の諸將、他日必ず皆な將相と為らんと。後、犀は果して門下平章事を拜す」。

すでに高麗の朝廷は、和を請うている時期であった。なお亀州は降らない。その間、高麗史五八地理志によれば「兵馬使朴犀、力を盡して之(蒙兵)を禦ぎ、力屈して猶ほ降らず。功を以て陞して定遠大都護府と為」された。高麗の朝廷は、一方では蒙古に恭順をよそおいながら、一方では抗戦を称えていたのである。こうした面従腹背の態度は今後も貫かれることを、ここに注目しておきたい。

亀州が降ったのは翌年正月のことであった。それも朝廷からの勧降使に接して、やむなく城を開いたのである。但し、高宗世家には明文なく、その間の事情は朴犀伝および節要によって窺われる。節要にあっては、亀州の降を高宗十九年春正月の冒頭におき、それにつづくのは正月十一日の記事であるから、上旬には開城をみたものと考えられよ

う。朴犀伝に曰く。

「明年。王、後軍知兵馬事右諫議大夫崔林壽、監察御史閔曦を遣はし、蒙古人を率いて亀州城外に往かしむ。諭して曰く、已に淮安公侹を遣はし、和を蒙古兵に講ず。我が三軍も亦た已に降れり。戦を罷め、出でて降るべしと。之を諭すこと、数四なり。猶は降らず。曦は其の固有を憤り、劒を抜きて自刺せんと欲す。林壽、更に之を諭す。犀笄、王命に違ふことをはばかり、乃ち降る。後、蒙古使至り、犀の固守して降らざるを以て、之を殺さんと欲す。崔怡、犀に謂ひて曰く、卿は国家に忠節無比なり。然れども蒙古の言も亦た畏るべきなり。卿、其れ之を圖れと。犀乃ち其の郷に退帰す」。

亀州と並んで、あくまで抗戦したのが、慈州であった。慈州の開城がいつのことであったか、高宗世家に記事がないので明らかにすることはできない。ただ節要が十九年夏四月の冒頭にかけて、慈州を固守した崔椿命の処置を議した宰枢の会議が開かれたことを録しているから、おそらくは三月中に開城したことであろう。

さて高麗史一〇三 崔椿命伝に曰く。

「高宗十八年、慈州副使と為る。蒙古兵、州を圍む。椿命、吏民を率い、固守して下らず。國家は蒙古元帥撒禮塔の詰責を以て、内侍郎中 宋國瞻を遣はし、降を諭す。椿命、門を閉ぢて對へず。國瞻、罵りて還る。三軍の將帥が撒禮塔に降るに及び、撒禮塔は淮安公侹に謂ひて曰く、慈州降らず、宜しく人を遣はして降を諭すべしと。侹は後軍陣主大集成を遣はし、蒙古の官人と城下に到らしむ。曰く、國朝及び三軍已に降る、宜しく速かに出で降るべしと。椿命は城樓に坐し、人をして對へしめて曰く、朝旨未だ到らず、何をか信じて降らんと。集成曰く、淮安公已に来り、降を請ふ。故に三軍も亦た降る。此れ信に非ざらんやと。對へて曰く、城中の人、淮安公あるを知らずと。遂に拒みて納れず。蒙古の官人、集成を呵責して城に入る。椿命、左右をして之を射さしむ。皆な奔り却く。是の如きこと數

四、終に下らず。集成、深く銜みて返る。撒礼塔怒り、必ず之を殺さしめんとす。王以て宰樞に問ふ。皆な末滅を請ふ。集成、崔怡の第に詣りて曰く、椿命は命を拒みて降らず、蒙古怒り去る。禍、將に小ならざらんとす。宜しく之を殺し、以て蒙古に示すべし。今、上及び宰樞、皆な猶予して決せず。請ふ、公よ獨斷して之を殺せ、と。怡、諾す。是に於て宰樞も皆な已むを得ず、之に従ふ。獨り兪升旦のみ、以て殺すべからずと為し、聞く者歎服す。怡は内侍李白全を遣はし、西京に往きて、將に之を斬らんとす。椿命、辭色變ぜず。蒙古の官人曰く、此れ何んぞやと、白全曰く、慈州の守なりと。官人曰く、此の人、我に於ては命に逆ふと雖も、爾に在りては忠臣たり。我れ且に殺さざらん。爾既に我と和を約せり。城を全うせる忠臣を殺して、其れ可ならんや、と。固く請ひて之を釋す。後、功を論ずるに椿命を以て第一と為し、擢でて樞密院副使に拜す」。

長文の引用を敢てしたが、亀州と慈州との両城の場合、外圧に対する抵抗の姿勢が、はっきり示されている、と考えるからである。さらにまた、朴犀や崔椿命において、国家というものが、どのように意識されていたかも、よく窺えるであろう。国家の意思として示されたものも、その実質においては武人政権の政策に過ぎない。王命、すなわち崔氏政権の命令に逆らっても、それは決して国家への反逆を意味するものではなかった。さらに記録のなかにあらわれる人物の動きだけを見ても、抵抗と屈従との見事な対比が、なまなましく現代の私たちに示されている。

ともあれ、このようにして蒙古の第一次侵寇は、ひとまず終りを告げた。その戦果としては、元史[三] 太宗本紀が三年辛卯、八月の条に掲げた次の記事を以て結論とすることができるであろう。

是月、以高麗殺使者、命撒禮塔、率師討之、取四十餘城。高麗王徹(高宗)、遣其弟懐安公(淮安公)請降。撒禮塔承制設官、分鎮其地、乃還。

すなわち蒙古軍は高麗の王京に迫り、四十余城を陥落せしめて、その地に達魯花赤 daruγači を分鎮せしめ、以

て班師したのであった。しかるに池内『征伐』においては、この「四十餘城」という数を誤りとし、さきに引いた元史○一二吾也而伝の「十餘城」、および同一九四移剌買奴伝の「十四城」という記述に注目し、蒙古軍の取った城数を「十四城」と訂正された。しかし、さきにも論じた如く、吾也而伝や移剌買奴伝の挙げた城数は、かれらの率いる軍が陥落せしめた城数を示したものであり、そのなかには高麗領外の城もふくまれている。かつ池内『征伐』の論述では、翌年における洪福源の反逆に関し、元高麗記事や元史一五四洪福源伝の挙げる「北界四十餘城」という所伝をも併せ論じているので、この問題についての私見の詳細は、次の機会に述べたいと思う。結論としての私の考えは、元史の所伝を変更すべき必要は全くない、とするものである。